

統によつて内地窯製品にまで及ぶ。陳列面積の狭小なるにも拘らず、殆んど東洋古陶磁全般に互るものを取扱はうと試みた爲、或部分に於ては充分な説明なくしては稍唐突と考へられる陳列法の行はれた所もないではなかつた。(正木)

本邦洋畫發達資料展觀 東京美術學校に於ては、文部省圖書講習會開催を機とし、十月二十日より二十四日迄、其陳列館に於て、上記の如き我國洋畫の源流より明治時代の諸作家に至る作品を陳列展觀した。これは公開のものでなく、又參考陳列品を加へて約六十點の小展觀ではあつたが、相當系統的に集められた展觀であつた。即ち、明治以前の作品としては、洋畫傳來當初の遺品と思はるる切支丹繪畫數點を初めとし、蠻華風を傳へた喜多元規の黃檗畫像、降つて司馬江漢、田善の作品、長崎系の川原慶賀、若杉磯八等の作品に加へて、渡邊崋山、椿椿山の肖像畫、菊池容齋の洋畫摸寫等があつた。明治時代に入つては、横濱に在住したワグマン、其門人高橋由一、初代五姓田芳柳を初め、英國に學べる國澤新九郎、伊太利亞に學べる百武兼行、獨逸に學べる原田直次郎等の夫々の代表作があり、又工部美術學校に聘せられて教師となつたフォンタネージの遺品、彼の薰陶を受けた小山正太郎、淺井忠、守住勇魚等の初期の作品があつた。

猶、參考陳列として、黒田清輝を初め、東京美術學校西洋畫科諸教授の西洋名畫の摸寫が併せ陳列された。唯、此展觀に於て、秋田系洋風畫のなかつた事は残念であつた。(隈元)

源氏物語繪卷展觀 去十月廿五日、廿六日名古屋市徳川園に於て信長、秀吉、家康の三傑を偲ぶ三傑會茶會が開かれた時、是を記念に同園内の徳川美術館で侯爵徳川義親氏所藏の隆能源氏繪卷三卷と男爵益田孝氏所藏の同一巻とが併せ展觀された。尾州徳川家本三卷は昨年六月に短期間帝室博物館に於て公開されたのであるが、ここに再び展觀の機を得られたことゝ、同じく祕寶益田家本一卷の出陳を見るに至つたことは欣快とするところであつた。この絢麗無比な濃彩のつくりゑに就ては殊更に説くまでもないが、兩家の祕寶がかく同時に觀覽

に供せられ、彼此相對照し檢攷する機會が與へられたことは感謝の至りであつた。

益田家本一卷は繪四紙、詞十五紙をば徳川家本と同じく田中親美氏の周到精緻なる技法の下に、分離改裝し桐箱に納めありて、後の世の爲にも保存の完好を期する用意の程が示されてゐた。また三傑會茶會に因んで、長興寺所藏國寶信長畫像、妙興寺所藏秀吉畫像、徳川家所藏家康畫像の外に、名物無準自畫讚蘆葉達磨圖、及び長次郎作水指、花入古銅きねのをれ、茶入古瀬戸肩衝、利休泪の茶杓、平蜘蛛釜等の名器が同時に出品されてあつた。尙源氏物語繪卷の中、徳川家本三卷は三傑會茶會の終了後も引續き廿七日より三日間一般に公開されて、斯界に貢獻するところ尠くなかつたと云ふ。(菅沼)

美術研究所時報

美術研究所に於ては岡崎及東京京都所在の櫻間青崖作品約三十點を蒐集して十一月廿八日美術懇話會を開催し、菅沼貞三氏の講話を行ひ、引續き二十九及三十の兩日この展覧を公開して研究者の參考に供した。

寄贈圖書

帝室博物館年報	昭和十年	自一月至十二月
鈴木章作品集		
陽成二作品集		
Japanese Art		
圖書と手工	二〇〇九	
東陽	一ノ七	
學校美術	一〇ノ一一	
汎工藝	一四ノ九	
帝國圖書館報	二九ノ五、六、七	
建築雜誌	六ノ八	
美術界	六ノ六	
みづゑ	三八一	
帝室博物館		
齊藤素巖氏		
同		
津田敬武氏		